

特別活動と生徒指導との連携についての一考察

A Study on the Corporation of Extra-curricular Activities and Student Guidance

濱 本 一

Makoto HAMAMOTO

概要

今日、いじめの問題や不登校児童生徒などへの対応について、学校現場では惜しみなくその解決のための取組を行っているが、そのためには児童生徒一人一人に望ましい人間関係づくりや自己肯定感、自己指導能力を醸成させる特別活動及び生徒指導の連携・充実を図ることが重要である。

特別活動は望ましい集団活動を通して自主的、実践的な態度を育て自己を生かす能力を養う我が国特有な教育活動である。生徒指導の機能を活かしながら特別活動の内容を充実させ支持的風土のある学級づくりを図るために特別活動と生徒指導の連携について一考察を提示したい。

キーワード：望ましい人間関係、自己指導能力、生徒指導の機能、支持的風土

Abstract (Max 150 words)

These days, teachers make a strong effort to take care of the matter of bullying and school refusal. To resolve these issues, it is important to enrich extra-curricular activities and student guidance, which make students establish a desired relationship with others, and develop self-esteem and self-discipline. Extra-curricular activities are the educational activities that are particular in Japan, and these activities develop students' independent and practical attitudes and abilities to make the best use of themselves through the desired group activities. This paper discusses the corporation of extra-curricular activities and student guidance, in which the content of extra-curricular activities are enriched by utilizing the function of student guidance, to create the classroom with supporting atmosphere.

Keywords: desired relationship with others, self-discipline, the function of student guidance, supporting atmosphere

目次

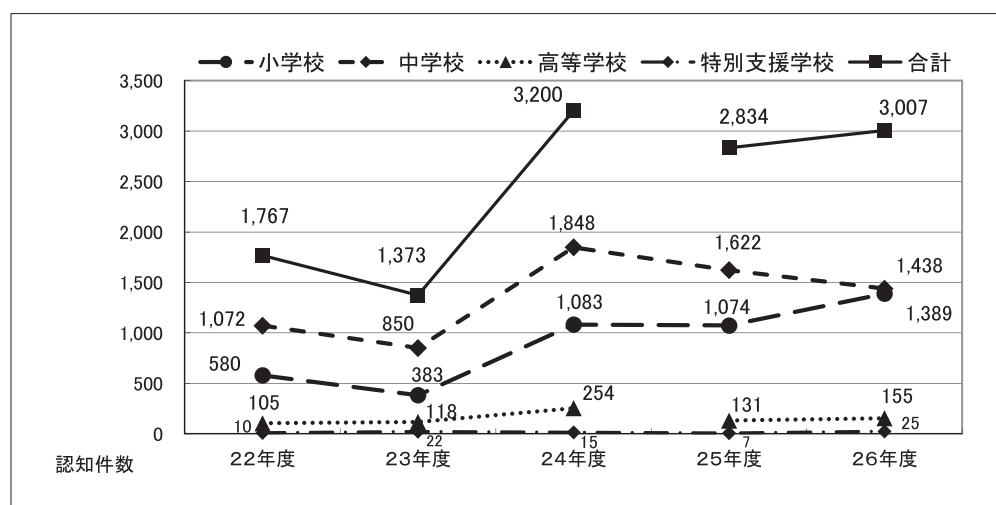
1. 埼玉県におけるいじめの状況とその背景
2. 埼玉県における不登校児童生徒の状況とその背景
3. 特別活動の特性
4. 生徒指導の意義
5. 特別活動と生徒指導との連携の意義
6. 今後の課題

1. 埼玉県におけるいじめの状況とその背景

埼玉県教育委員会が実施した平成26年度「埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(図1～図6)における「いじめの認知件数の推移」から考察する。

平成23年度から急激に認知件数が増加している。その背景には平成23年10月11日に発生した大津市の中学2年生のいじめ自殺事件を受け、各学校におけるいじめ認知件数についてできるだけ認知できる件数をあげた結果がある。

その後、各校種ごとに見ても横ばいの状況であるが、小学校については平成25年度から26年度にかけて増加している。

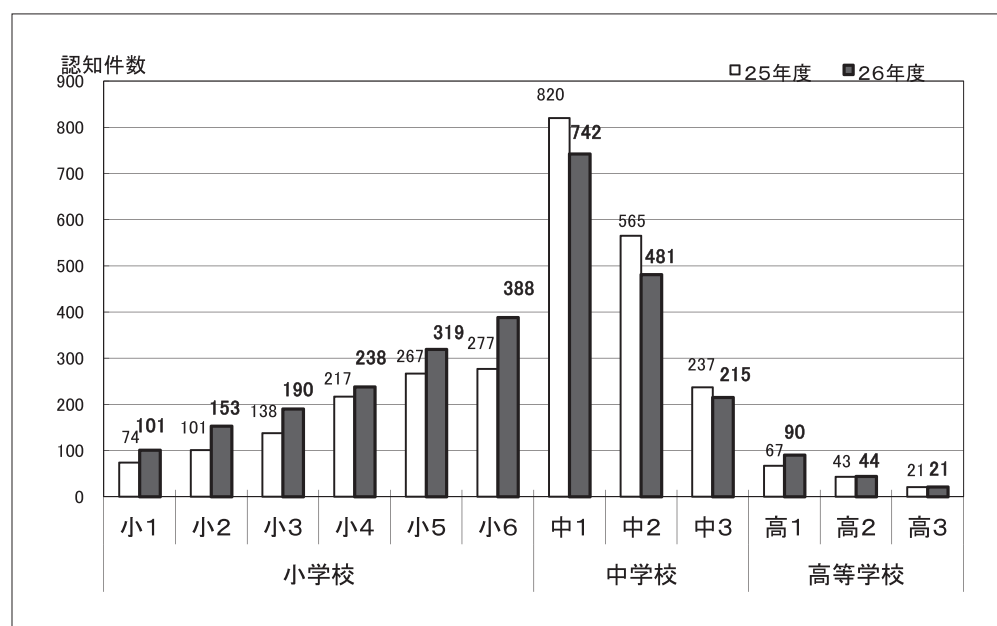


(図1) 埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
(いじめの認知件数の推移)

いじめの定義については「いじめとは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものを含む。)であって、当該行為

の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。」と規定されている。(いじめ防止対策推進法第2条)

次に、県内の「いじめの認知件数」を小学校、中学校の学年ごとに見てみる(図2)。



(図2) 平成25・26年度学年別のいじめ認知件数

小学校では児童の発達段階に応じながら学年があげること増加しており、平成25年度と平成26年度を比較すると平成26年度は増加している。一方、小学校から中学校への進学に関わり中学校1年生では認知件数が大幅に増加している。これは児童が中学校の新しい環境での学習や生活、人間関係に不適應をおこす、いわゆる「中1ギャップ」の現象の一つとして、捉えることができる。しかし、中学校では学年が進むにつれ件数が大きく減少していることは注視すべきである。

また、もう一つ注視すべきことは、小学校では平成25年度と26年度を比較した際に26年度がどの学年も増加しているが中学校では減少傾向にある。小学校と中学校では教育に関わる文化の違いがあり、その差異を捉えておくことが重要である。その差異を理解することはいじめや不登校児童生徒への対応策等を考察する上で把握しておかなければならないことである。

ここで小学校と中学校の主たる差異について、授業形態や指導方法、評価の仕方、生徒指導の仕方、特色ある教育活動の観点から次のようにあげてみる。

【主な小・中学校段階間の差異】

- ①授業形態の違い(小学校:学級担任制/中学校:教科担任制)
- ②指導方法の違い(小学校:丁寧にきめ細かく指導、比較的活動型の学習が多い)

／中学校：小学校に比べてスピードが速い、講義形式の学習が多い)

③評価方法の違い（小学校：単元テスト中心、関心・意欲・態度が重視される傾向

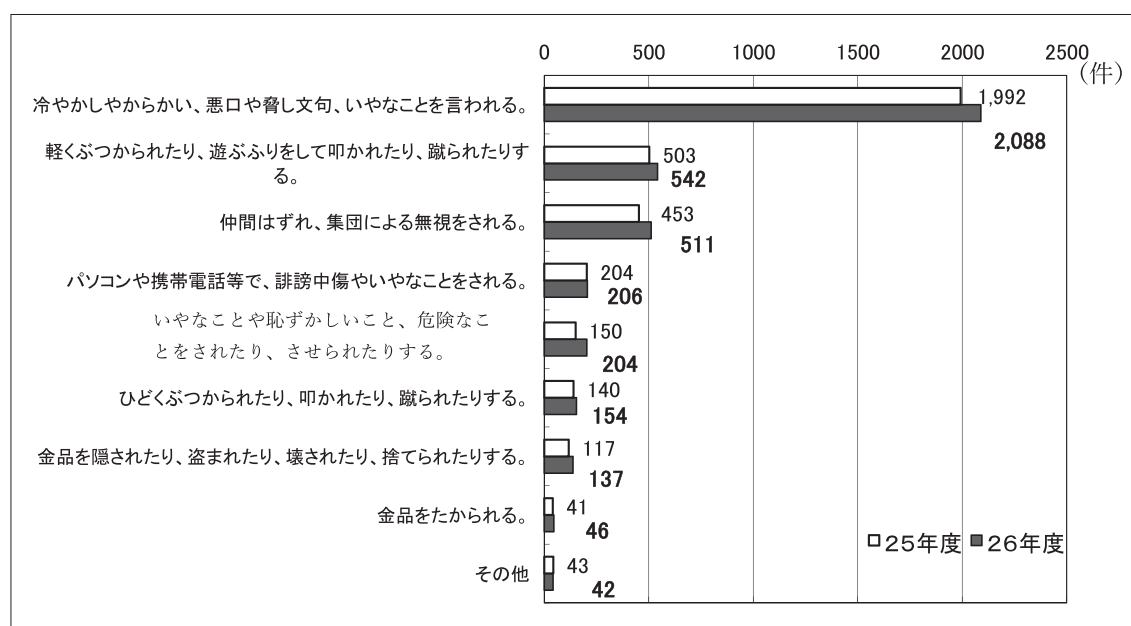
／中学校：定期考査中心、知識・技能が重視される傾向)

④生徒指導の手法の違い（中学校では思春期を迎える生徒を指導することもあり、小学校と比較して規則に基づいたより厳しい生徒指導がなされる傾向)

⑤部活動の有無（中学校から部活動が始まり、放課後のみならず休日の活動を行う機会も増えるなど、子供の生活が劇的に変化すること)

(中央教育審議会答申 「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築」 平成 26 年 12 月 22 日)

各校種及び学年ごとの認知件数の状況を踏まえ、どのようないじめの態様があるのかを考察する。(図 3)



(図 3) いじめの態様 (いじめの態様 小・中・高・特別支援学校の合計) 複数回答可

図 3 から「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、いやなことを言われる」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする」、「仲間はずれ、集団による無視をされる」が態様の上位を占めているが、このような態様は学校生活の中のどのような場面、場所で起こるかである。それは子供たちが毎日学校生活を送る学級という集団に起因することがほとんどであり、いかに学級における望ましい集団活動や人間関係づくりが重要であるかが読み取れる。

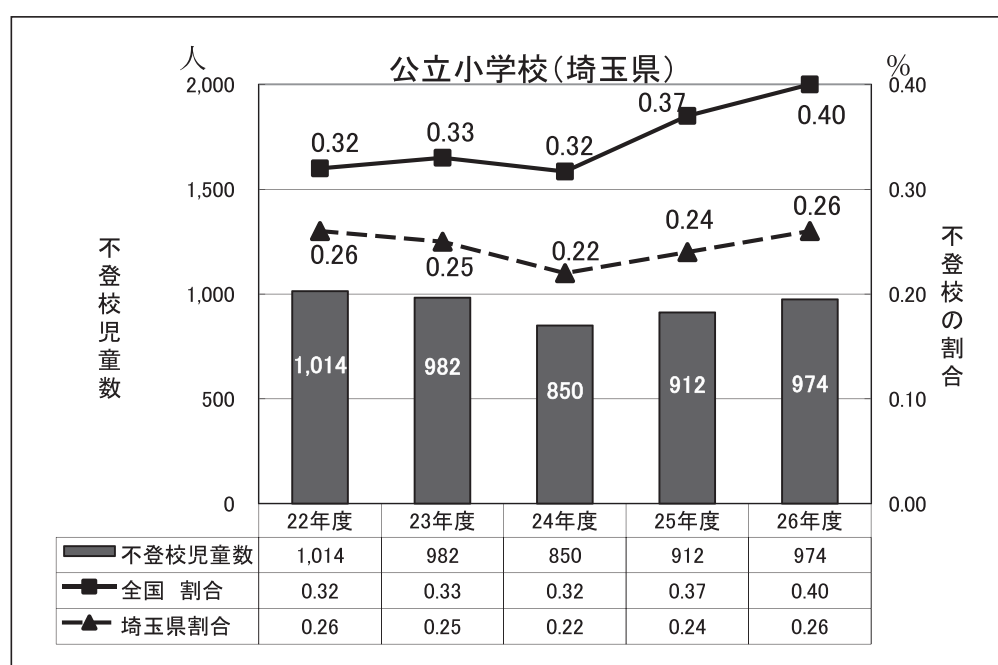
2. 埼玉県における不登校児童生徒の状況とその背景

今日的な生徒指導上の教育課題の一つに不登校児童生徒への対応があげられる。

不登校の定義については、年度間に連続または断続して 30 日以上欠席した児童生徒のうち、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある（ただし「病気」や「経済的な理由」によるものを除く）ことと規定している。（児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査より）

埼玉県における不登校児童生徒数と埼玉県及び全国の不登校の割合の推移をしてみる。

（図 4）

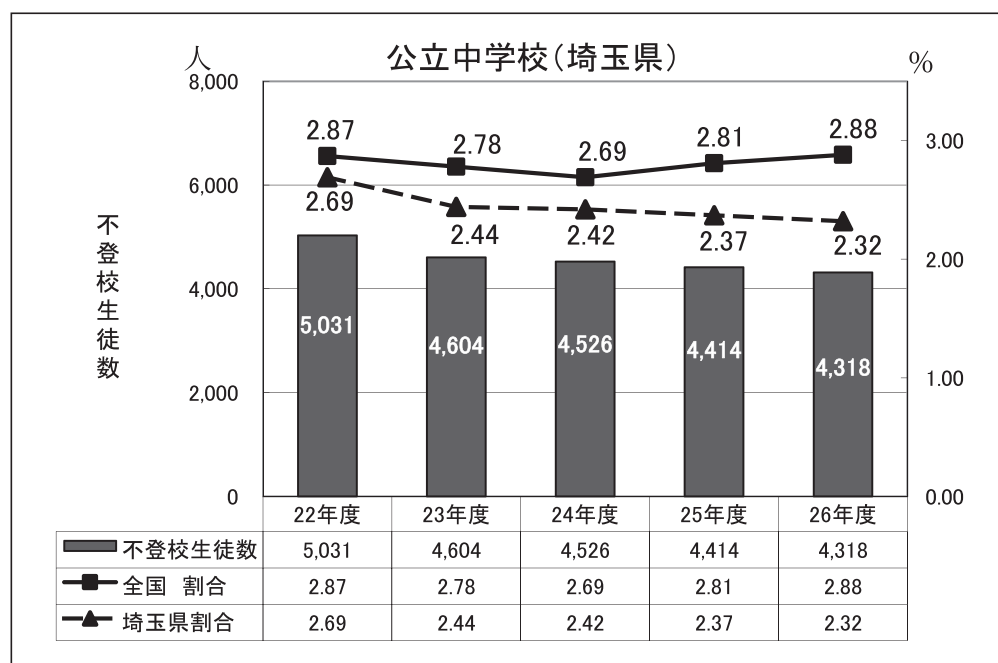


（図 4）埼玉県における不登校児童生徒数と埼玉県及び全国の不登校の割合の推移（小学校）

小学校は図 4 から平成 24 年度までは減少傾向にあったが、平成 24 年度以降になると増加傾向にあり、これは埼玉県に限ったことではなく全国的な傾向にある。その要因の一つに教員の大量退職時代を迎える中、新採用教員の増加に伴い児童一人一人へのきめ細かな適切な指導と保護者等との信頼関係のある、協働体制のある連携が学校全体の指導力に至っていない状況にあると捉えることができる。と考える。

一方、中学校での推移（図 5）を見てみると全国的には小学校と同様に平成 24 年度を境に増加しているが、埼玉県では毎年減少傾向にある。この埼玉県の現象の要因の一つには各中学校の教員の年齢構成の影響があると考えられる。小学校での年齢構成は 50 代と

20代の教員が多くを占め、ミドルリーダーと呼ばれる40代が少ない一方、中学校では40代のミドルリーダーの割合が小学校と比べて多いため、年代を超えた指導力の伝承がスムーズに行われているためではないかと考えられる。この背景には団塊世代が大量に教員に採用された一方、その後採用人数が大きく減少したことがある。



(図5) 埼玉県における不登校児童生徒数と埼玉県及び全国の不登校の割合の推移
(中学校)

また、小学校の不登校児童と比べて中学校での不登校生徒は、遊ぶためや非行グループに入ったり、学校に魅力を得ることなく無気力で登校しなかったり、登校する意欲はあるが体調不良で登校できないなど登校しない生徒あるいは登校できない生徒が一定の生徒に固定化されている傾向があると考えられる。このような傾向を改善するためにも生徒一人一人が学校や学級への自己存在感を得られる居場所づくりが重要となる。

実際に埼玉県での不登校へのきっかけとなった要因について(図6)から考察してみる。

不登校のきっかけとなったと考えられる要因として、大きく分類すると人間関係、学業、無気力・情緒的混乱、家庭環境である。ここで注目したいのは人間関係、学業については主として不登校児童生徒が在籍している学級で発生する状況として捉えられる。また無気力・情緒的混乱については主として所属する学級での存在感が希薄であるため、学級での自己存在感の醸成が必要であろう。

このようにいじめや不登校の状況を考察すると、いじめや不登校児童生徒の解消のためには児童生徒が所属する学級で自己存在感を得られる学級となるよう居場所づくり、望ましい人間関係づくりが図れる学級集団づくりがいかに重要であるかがわかる。

区 分	小学校		中学校		合 計	
	児童数	割合 (%)	生徒数	割合 (%)	児童生徒数	割合 (%)
いじめ	9	0.9	28	0.6	37	0.7
いじめを除く友人関係をめぐる問題	85	8.7	612	14.2	697	13.2
教職員との関係をめぐる問題	17	1.7	39	0.9	56	1.1
学業の不振	39	4.0	227	5.3	266	5.0
進路にかかる不安	2	0.2	32	0.7	34	0.6
クラブ活動、部活動等への不適応	0	0	77	1.8	77	1.5
学校のきまり等をめぐる問題	5	0.5	36	0.8	41	0.8
入学、転編入学、進級時の不適応	27	2.8	85	2.0	112	2.1
家庭の生活環境の急激な変化	74	7.6	165	3.8	239	4.5
親子関係をめぐる問題	135	13.9	244	5.7	379	7.2
家庭内の不和	43	4.4	140	3.2	183	3.5
病気による欠席	79	8.1	212	4.9	291	5.5
あそび・非行	6	0.6	314	7.3	320	6.0
無気力	260	26.7	1,133	26.2	1,393	26.3
不安など情緒的混乱	277	28.4	955	22.1	1,232	23.3
意図的な拒否	45	4.6	204	4.7	249	4.7
上記「病気による欠席」から「意図的な拒否」までのいずれにも該当しない、本人に関わる問題	16	1.6	42	1.0	58	1.1
その他	19	2.0	8	0.2	27	0.5
不明	1	0.1	7	0.2	8	0.2
計	1,139		4,560		5,699	

*割合 (%) は、不登校の児童生徒の人数に対する割合です。

(図 6) 不登校のきっかけとなったと考えられる状況 複数回答可

望ましい人間関係のある学級づくりを進める上で特別活動の充実は不可欠である。教育課程において、特に学級経営に密接な関係にあるのは特別活動であり、特別活動の目標や意義を踏まえ、望ましい人間関係が醸成される学級づくりに取り組むことが必要である。

特に教員養成大学においては特別活動への理解とともに指導法を丁寧な指導し、教師として第一歩としての学級づくりや学級経営を的確に行えるよう学生への指導を充実させることが必要であると考ええる。

学生への指導の際には、単なるテクニックやノウハウを教えることに終始することには十分注意しなければならない。まず教師を目指す学生には教師としての使命感や心構えを醸成しなければいけない。テクニックやノウハウがあれば優れた教員であるという思い上がった教師を育成してしまうと、いざ学校現場に立った時、自分勝手な行動や自己満足な言動など、学校組織の一員としての機能は果たすことはできない。その結果、学校組織の秩序は崩れるとともに児童生徒は教師をランク付けし、学校組織としての生徒指導、さらには学校経営をも崩壊させてしまう可能性が大である。このように養成・育成された教員は支え合ったり協力し合ったり、認め合ったりする支持的風土のある学校の組織の一員としての貢献力は乏しく学級づくりも独りよがりのものとなると考えられる。

支え合ったり協力し合ったり、認め合ったりする支持的風土のある学級づくりを構築す

る上で、特別活動の特性を十分に展開させることが肝要であり、その際、生徒指導の機能を的確に活かすことが重要である。

3. 特別活動の特性

小学校における特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」(小学校学習指導要領)である。まさしく望ましい人間関係の下、支持的風土のある学級において児童生徒一人一人が自らの目標を立て行動するとともに、諸問題に気づき、考え、行動する力である自己指導能力を身に付け、自己実現を図ることを目指している。

特別活動の特質として、一つは「集団活動を特質とすること」である。この集団とは活動する目標があり、目標を達成するための方法や手段を全員で考え実践していく集団のことであり、また児童が様々な集団で活動することにより、人間関係を深めるとともに生活経験を豊かしたり、思いやりの心など道徳心や豊かな人間性や社会性を育んだり、さらには学力の向上にもつながる。

二つ目は「集団による実践的な活動」である。児童がよりよい学校生活や学級生活を目指して、諸問題を自分たちの力で解決するための「なすことによって学ぶ」活動が集団による実践的な活動となっていく。

また、特別活動は、「望ましい集団活動を通して」が根底にあり、望ましい集団づくりを根本原理としており、他の教科等の目標にはこのような望ましい人間関係に関わる文言は見当たらない。

「望ましい集団活動」とは、どのような活動であるかについては、小学校学習指導要領特別活動編解説には次のような条件が示されている。

- | |
|--|
| <p>ア 活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること。</p> <p>イ 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、話し合い、それを協力して実践できること。</p> <p>ウ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解し、自分の役割や責任を果たすとともに活動の目標について振り返り、生かすことができること。</p> <p>エ 一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結び付きが強いこと。</p> <p>オ 成員相互の間に所属感や所属意識、連帯感や連帯意識があること。</p> |
|--|

カ 集団の中で、互いのよさを認め合うことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長されるようになっていること。

小学校での特別活動の活動等は「学級活動」、「児童会活動」、「クラブ活動」そして「学校行事」で構成されている。

児童一人一人はお互いのよさや可能性を認め合い、伸長し合うことができる支持的風土の下に実践的な活動を通して、児童一人一人が改めて自らの個性を発見したり、他との触れ合いを深める中で自他の個性に気づき理解したりして、児童一人一人が更に自信を高めることができる。自分のよさや可能性を学校生活や学級生活に生かすことができる支持的風土のある集団を醸成していくことが重要であり、このような学級づくりが求められる。

その際、教師は上述した条件等を満たしながら、例えば、希薄な人間関係などの中から起こるいじめや不登校が生じないよう望ましい学級集団づくり、すなわち支持的風土のある学級づくりが大切であり、常に適切な学級への指導（集団指導）と個への指導（個別指導）に心がけ、指導の工夫改善を行うことが集団と個の更なる成長を促す。

特に、特別活動の指導においては児童が共通の目標を設定し、その実現にむけて取り組む、すなわち「集団において、なすことによって学ぶ」という特別活動の特質である活動の場面や機会をより多く設定していくことが大切である。

「なすことによって学ぶ」ことを通して、児童生徒が学校集団や学級集団の一員としての自覚をもって学校生活や学級生活を向上しようとする活動を積み重ねていくことは、自己の役割や責任を果たす態度、規律を守る態度、他を思いやる道徳心などを培う基盤となる。その際、学校や学級集団の一員として、生活の向上や望ましい人間関係を築くために、集団活動を行うのに必要な知識や技能、関心意欲や思考力、判断力、表現力を身につけるとともに、学級や学校の集団のよりよい向上への主体的な意欲や態度を育成することが大切である。児童生徒一人一人にこのような資質や能力を育成する個人指導を行うと同時に望ましい集団となる条件を満たす学級づくり、学級経営を行うことが肝要である。

望ましい人間関係が醸成され、支持的風土に満ちた学級はいじめや不登校などの児童生徒に関わる問題は必然的に減少し、学級生活や学習など、様々な場面で児童生徒の生き生きとした輝いている姿が増長されるはずである。

特別活動の充実は学校及び学級などの集団における望ましい人間関係づくり、集団活動の基盤となる教育活動であり、生徒指導との連携は不可欠である。

4. 生徒指導の意義

生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的

資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」である。(文部科学省 生徒指導提要)

この生徒指導のねらいは特別活動の目標と同様に児童生徒一人一人の自己指導能力を図り社会的自立への資質能力の向上を目指しているからこそ、特別活動の取組を進める際には、生徒指導との連携が不可欠である。生徒指導を進めるに当たり、特に留意すべき点は児童生徒の自己実現を図っていくための自己指導能力を身に付けさせることが必要である。

そのためには学校生活や学級生活の場面で自己選択や自己決定の場や機会を設定し、自己実現できるよう、また自己実現をめざすために惜しみない努力ができるよう教師の適切な指導と所属する集団が望ましい集団となるよう指導することが必要である。

児童生徒一人一人の自己実現は自分だけの行動だけではなく、集団の一員として認められたり支えられたりしていくことも重要な要素であるため、学校生活や学級生活の全ての場面や機会を通して、具体的には授業中や休み時間、給食の時間、清掃の時間、朝の会・帰りの会、放課後など全ての学校生活で行われなければならない。

生徒指導のねらいを達成するための指導については、児童生徒一人一人の個性の伸長、社会的な資質や能力・態度、自己実現ができる資質・態度を育成するために生徒指導の機能を熟知し、児童生徒一人一人の指導に対して生徒指導の機能を十分に発揮させていくことが重要となる。

生徒指導の機能とは、以下の3つの点から捉えることができる。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①児童生徒に自己存在感を与えること②共感的な人間関係を育成すること③自己決定の場を与えること |
|--|

(文部科学省 生徒指導提要)

この生徒指導の機能を有効に活用させるためには、児童生徒一人一人はそれぞれが個性(能力・適性、興味関心、夢や希望等)、また家庭環境や生育歴も異なるため、児童生徒一人一人への多面的・客観的・総合的な深い児童生徒理解が必要である。

児童生徒一人一人の指導に当たっては、「受容・傾聴・共感」を心がけなければならない。具体的には、常日頃から児童生徒一人一人のありのままの姿を受け入れる受容の姿勢、一人一人の言葉に耳を傾けしっかりと聞く傾聴の姿勢、一人一人の気持ちをしっかり感じ取り内面への共感の姿勢であり、これが深い児童生徒理解と信頼関係につながってくる。

教師のこのような指導を通して、児童生徒一人一人の自己指導能力の育成を図る個別指

導を推進することができ、また児童生徒一人一人の成長が集団への成長へとつながる相乗効果を生むこととなり集団指導ともなる。すなわち児童生徒一人一人が自己指導能力を育みながら、所属する集団が望ましい人間関係のある集団へと醸成されていくことにもなる。

さらに望ましい集団活動を通して、いっそう児童生徒一人一人の自己指導能力が向上していくことになる。このような関係の「個」と「学級集団」の育成、すなわち相乗効果のある関係づくりが大切である。

このように望ましい人間関係づくりへの意欲や態度を育成し、人間としての生き方への自覚を深め、社会の中で自分の個性を活かせるよう特別活動を充実させることは生徒指導のねらいにつながる。

特別活動の目標と生徒指導のねらいとは共通性が多く、特別活動とともに生徒指導の充実を図ることは、望ましい人間関係、望ましい集団づくり、すなわち支持的風土のある学級づくりを効果的に進められるとともに所属する個のよりよい伸長が図られる。

5. 特別活動と生徒指導との連携の意義

特別活動と生徒指導との連携については、小学校学習指導要領総則に「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること。」と、また特別活動編には「学級経営の充実を図り、個々の児童についての理解を深め、児童との信頼関係を基礎に指導を行うとともに、生徒指導との関連を図るようにすること。」が示されている。

また、小学校生徒指導資料（文部省 昭和 57 年 3 月）には、次のように示されている。

- ア 所属する集団を自分たちの力によって円滑に規律正しく運営することを学ぶ
- イ 集団生活の中で、それぞれの個性を生かし、人格を尊重する生き方を学ぶ
- ウ 集団としての連帯意識を高め、集団の一員としての望ましい態度や行動の在り方を学ぶ

これらの内容は特別活動の学級活動と深いかわりがあり、まさしく特別活動と生徒指導との連携、言い換えれば「望ましい人間関係づくり」、「支持的風土のある学級づくり」には「生徒指導の機能」の活用が重要であることを示している。

さらに、学級づくりと生徒指導との関連において

ア 学級を単位として、きめ細かな生徒指導を行う。

イ 生徒指導の機能を補充し、深化し、統合する役割をもっている。

ウ 生徒指導の観点から他の教育活動を充実するための条件整備の役割を果たしている。
があげられる。

このように支持的風土のある学級づくりへの指導に当たっては、教師と児童、児童相互の人間的な触れ合いを通して、助け合い、認め合い、そして自己のよさや可能性に気付き自信をもって、学級の中でよりよく自己を生かす活動としての特別活動の特質を活かすことが必要である。さらに併せて生徒指導の機能を十分に活かし、他者との触れ合いを深め他への排他的な考え方はないか、一人一人が受け身でなく主体的に活動しているかなどに注視しながら、児童生徒一人一人に自己決定の場面や機会を与え、自己存在感や自己実現の喜びを味わえるようにしていくことが求められる。

このように、支持的風土のある学級づくりは、「望ましい人間関係づくり」であるが、その際、特別活動の「望ましい集団活動」の条件をしっかりと踏まえ、「生徒指導の機能」を十分に生かし、その条件を満たすよう児童生徒一人一人を、そして集団を育成していくことが重要である。

特に、特別活動では集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築き、人間としての生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養い、自主的・実践的な態度の育成とする目標の実現に向かって指導されている。このような指導を積み重ねることから、集団はさらに望ましい人間関係のある支持的風土を有する集団として成長し、児童生徒は集団への所属意識、集団の一員としての自覚、進んで学級や社会に貢献しようとする意欲・態度を一層高めていくこととなり、さらには児童生徒の自発的・自治的な取組を助長し、児童生徒一人一人の自信を高め、自主的・実践的な態度の育成が強化される。

児童生徒は教師や他の児童生徒から受容され、認められ支持されることから、集団における自分を客観的に把握し、自信と心の安心感をさらに高めることができる。

このような望ましい人間関係のある、支持的風土のある学級では、児童生徒は目標に向かって自発的・自治的に様々なことに取り組みながら、自らの個性を磨き自己指導能力を育むとともに他人を理解し、自己を律し、他と協力して目標を達成するために全力を尽くすことを学ぶようになる。例えば、当番活動や係活動、清掃や委員会活動などの小集団での児童生徒の自発性、自主性のある活動である。

これらの指導を支えるものがまさしく「生徒指導の機能（児童生徒に自己存在感を与えること、共感的な人間関係を育成すること、自己決定の場を与えること）」であり、改めてその機能を確認し、その機能を児童生徒一人一人へのきめ細かい指導に活かすべきであると考えられる。

深い児童生徒理解の下、生徒指導の機能を十分に発揮し、教師と児童生徒、児童生徒相互の信頼関係の基盤づくりとともに、集団への所属感、共感的な人間関係、自己存在感、

自己決定の場面や自己実現の喜びを味わせ、自己指導能力や自己実現のための態度や能力の育成を図ることが、望ましい人間関係、望ましい集団活動による支持的風土のある学級づくりにつながっていく。

具体的には、学級における諸問題を学級全員で話し合いをし、民主的に解決策や目標などを合意形成するなど、また学級のきまりをみんなで作り、みんなで守ったりする活動などを通して、集団の秩序と規範意識の醸成と望ましい人間関係づくりを図るとともに、学級の一員としての自覚と責任の育成、他者との協調性の育成、集団の目標達成に貢献する態度の育成が期待される。

このような指導や活動を通して、児童生徒一人一人に学校や学級への存在感をもたせ、自己決定の場面や機会から自己実現が図れるよう、また他者の個性を尊重し、お互いを理解し合い、他者のよさを認め協力し合う望ましい人間関係を育み、一人一人が自らのよさを体感し自信をもてるようにすることが大切である。このような中、学級や学校生活の中で積極的に自分を生かせる支持的風土に満ちた学校文化、学級文化の形成が期待できる。

教員養成大学においては、この特別活動と生徒指導が連携した指導の在り方について、その意義と指導内容を充実させ、指導力を高めさせることが実践力のある教師の育成として欠かせないことである。

特別活動と生徒指導を連携させた指導を行う上では、学校の教育活動全体を通じて教職員全体で共通理解、共通歩調、共通協働で当たることが必要である。そのための協力体制・指導体制づくりが学校には求められる。

一方、学校だけではなく保護者や地域の方々、関係機関等との連携・協力は欠かせない。連携を密にしていくためには学校での特別活動の取組や活動、学校からの生徒指導上の依頼などを学校便りや学級便り、保護者会や地域懇談会を通して、情報提供し共通理解の下、連携・協力を図ることが大切である。なぜなら、そこには「開かれた学校づくり」を中心に「開かれた子供たちの活動づくり（特別活動の取組）」、「開かれた生徒指導」を視点として学校が中心となって連携・協力を更に取り組んでいく必要がある。

金山康博氏は校長の学校経営感覚をどう身につけるかについて、「地域立学校経営協議会」を提唱しており、その中で「PTAは学校運営上のパートナー」と主張している。

これは特別活動と生徒指導との充実を図る上でも、保護者や地域の方々を「パートナー」としての意識を持つことの重要性を示している。この意識がなければ単に学校から地域へのトップダウンの依頼でしかなく、そこには連携・協力は生まれにくく、保護者や地域の方々の協力という主体性が弱くなる。児童生徒の健全育成にとって保護者や地域の方々との連携・協力は「パートナー」でなければならない。それは学校と保護者等との「望ましい人間関係」の構築とともに支持的風土のある関係、学区（地域）となっていくからである。

学校外での活動として地域清掃などのボランティア活動など特別活動の取組は多様であり、また学校からの生徒指導の充実を図る上での依頼や協力についても同様である。学校と保護者、地域の方々等との関係は、年齢を超えて、性別を超えた中であっても、まさしく生徒指導の機能に支えられ、自他を尊重し、協力し合い、望ましい人間関係づくりとする支持的風土のある関係づくりが大切である。

保護者や地域の方々等とのよりよい連携・協力は、学校が特別活動や生徒指導の目標の達成のための児童生徒一人一人の自己指導能力の育成や支持的風土のある学級、集団づくりには欠かせない。

6. 今後の課題

児童生徒のよりよい成長を図る上で、個の成長と集団の成長を両輪として指導していかなければならない。今日、いじめや不登校などの教育課題の解決は社会問題ともなっており、児童生徒一人一人への指導、児童生徒が所属する集団への指導の充実が問われてきている。教育課程の中で特別の教科道徳や特別活動、また生徒指導は特に児童生徒の資質・能力に関わる目標を掲げている。言うまでもなく、この児童生徒一人一人の資質や能力の育成が個性の伸長、社会的自立などを目指し、いわゆる人格の完成に迫ることになる。

教育において、児童生徒一人一人にこのような資質や能力を育成する上で重要なことは個の伸長とともに集団の質の向上が不可欠である。そのためにも、学校においては「望ましい集団活動を通して」という特別活動の特質を踏まえ生徒指導の機能を十分に発揮し生徒指導を充実させることが必要である。

今後の特別活動と生徒指導の連携を深めるための課題として、一つ目は校務分掌上の工夫である。

各学校では校務分掌を全教職員で構成しており、その中に生徒指導としての分掌をほとんどの学校で位置づけている。その中心となっているのが生徒指導主事であり、学校全体の生徒指導の指導計画の立案を行い、それを具現化している。また他の分掌等との連絡調整に当たるとともに生徒指導に関わり指導助言を行っている。では、特別活動はというと教科等の分掌で位置づけたり、まさしく生徒指導の分掌の一環として位置づけたりしている学校が多い。特別活動は教育課程の教科等の一つであるため教科等の分掌に位置づけるのは当然かも知れないが、よりよい児童生徒一人一人の育成と集団の質の向上を図るためには特別活動と生徒指導とを切り離すことはできないと考える。そのためには、生徒指導の分掌に特別活動を中核に置くことが大切であり、また学校の規模にもよるが生徒指導主事が特別活動主任を兼ねるなどの工夫も考えられる。特別活動の特質を生かし生徒指導を推進することは、まさしく積極的な生徒指導の展開にもつながっていくものである。

二つ目は集団の規模の検討である。

児童生徒一人一人の健全な成長を図るためには、望ましい人間関係に支えられる支持的風土のある集団づくりが求められる。学校での集団は全校集団、学年を超えた集団すなわち異年齢集団、同好の興味関心をもつ集団など様々な集団が形成される。その中でも、児童生徒が学校生活のほとんどを占めるものが学級集団である。いじめや不登校等の問題も学級集団に起因するものが多い。学級集団の編制については学級編制及び教職員定数の標準に関する法律に定められており、その基準に沿って編制された学級集団の質を学校として学校組織として、いかに向上させるかが重要となってくる。そのためにも学級集団を望ましい人間関係づくりのある集団、支持的風土のある集団に高め、児童生徒一人一人に自己指導能力を育ませよう特別活動の特質と生徒指導の機能を共に生かしていく指導力を教師一人一人、さらに教師集団がいっそう高めていくことが必要である。また教師を目指す学生にも習得させていかなければならない。

学級には生活班活動、学習班活動、当番活動、係活動などその目的に応じた様々な集団が作られる。教師はその集団の目的達成のための活動を指導助言することは当然であるが、よりよい集団規模の中で効果的に望ましい人間関係を醸成し、支え合い認め合い、学び合うなどの支持的風土が構築されるよう集団規模についての考察は今後より一層必要である。

三つ目は特別活動と生徒指導の指導力を共に持つ教師の育成である。

特別活動と生徒指導との指導が有機的に連携し合い児童生徒一人一人の自主的、実践的な態度を育て、自己を生かす能力を養うためには、教師自らがそれらの教育的意義を踏まえ、それらの指導法を熟知しておかなければならない。特別活動と生徒指導との指導法が別のものと考えるのではなく、これまで述べてきたようにそれらの指導法が両輪となって児童生徒一人一人及び児童生徒が所属する集団の向上にむけて指導助言していくことが大切である。

そのためには、教師自らが積極的に自校の実践や研究から学ぶとともに校外での研修会等を通して指導力を高めていくことも必要である。しかしながら、今日、学校現場は多忙であり、なかなか校外での研修等に積極的に参加しにくい傾向にあるが、教師が意欲的に参加できるような研修体制づくりなどを検討することも必要がある。

また、教員養成大学では教師を目指す学生に対して、教師としての心構えや使命感、情熱を確実に育成するとともに、これらの基盤の下、特別活動と生徒指導の連携の在り方や指導法についての学びを深めさせることが今後さらに重要となる。

引用

- ・文部科学省「小学校学習指導要領」p.112, p.115, 2008.
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説特別活動編」p.9, p.31, 2008.
- ・文部科学省「生徒指導提要」p.1, p.6, 2010.
- ・文部省「小学校生徒指導資料 1・児童の理解と指導」p.21～23, 1982.
- ・文部科学省「いじめ防止対策推進法」第 2 条 2013.
- ・文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2010.
- ・中央教育審議会答申「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築」p.5, 2014.
- ・埼玉県教育委員会「埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査の結果について 2016.
- ・埼玉県教育委員会「埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2016.
- ・渡部昭男・金山康博・小川正人編「市民と創る教育改革」p.187, 2006.

参考文献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領」2008.
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説総則編」2008.
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説特別活動編」2008.
- ・文部科学省「生徒指導提要」2010.
- ・文部科学省「いじめ防止対策推進法」2013.
- ・文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2010.
- ・中央教育審議会答申「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築」2014.
- ・埼玉県教育委員会「埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査の結果について 2016.
- ・埼玉県教育委員会「埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2016.
- ・渡部昭男・金山康博・小川正人編「市民と創る教育改革」2006.